

宇都宮セントラルクリニックでは3テスラMRI「Achieva 3.0T(フィリップス)」を導入、高精度な画像診断を実施。佐藤俊彦代表(写真中央右)と斎藤友雄院長(同左)

●宇都宮セントラルクリニック代表
佐藤俊彦氏に聞く

約90名で、1カ月当たりおよそ1万3000件の読影を行っており、業績も順調に伸びています。「ドクターネット」

宇都宮セントラルクリニックでは、昨年に3T・MRIを導入し、様々な検査や診療に活用している。同クリニック代表の佐藤俊彦氏に、3T・MRIの有用性と同クリニックでの活用などについてインタビューした。また、3T・MRIの運用の現況を診療放射線技師長の金枝弘樹氏に聞いた。

3T・MRIを導入して、最先端の画像診断と診療に活かす

「宇都宮セントラルクリニック」の診療の現況についてお聞かせください。
開院は1997年です。その前年に、マンションの一室を借りて、他院からの依頼により遠隔画像診断を行う「ドクターネット」の事業を立ち上げていきました。しかし、放射線機器の急速な進化にキヤッチャップするには、やはり最新の機器に触れていることが重要です。その環境を整えるために準備を始めたのがクリニック開院のきっかけでした。

アメリカには、画像診断を専門に行う「イメージングセンター」がありますが、当院はそれをモデルとしつつも、将来、画像診断の診療報酬が減少するという予測もあって、外来診療と人間ドックを絡めた形でスタートしました。現在、1日当たりの患者数は約150名です。「ドクターネット」は、現在読影医が

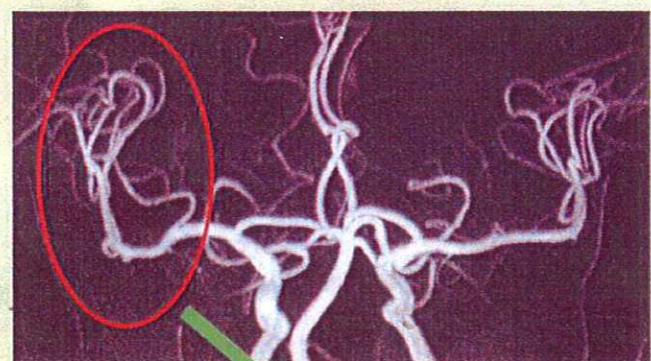
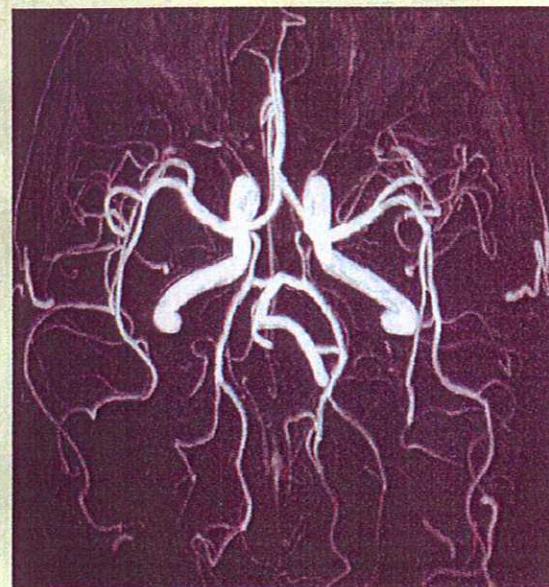
検査体制を探されていますが、その理由をお聞かせください。

MRIは、得られる情報量がCTなどに比べて多く、また様々な撮像法が可能であることです。当院では高磁场の3Tと1・5TのMRIを1台ずつ設置しています。アメリカのイメージングセンターでは、ハイエンドの機種とオープンMRIなどロードの機種という組み合わせが多く、当院でもかつてはオープンMRIを導入しましたが、使用する機会があまりありませんでしたね。

3テスラMRI「Achieva 3.0T」画像

【頭部領域】

頭部領域のMR Angiography画像。1.5Tのものと比べ、より鮮明な画像が得られ、これまで描出困難だった細かいところまで診断が可能



右中大脳動脈瘤のMR Angiography画像

【3D Imaging (WAVE)】

3Tによる腹部ダイナミックのMIP画像。非常に高い分解能を実現している



【Diffusion Tensor Imaging】

頭部のDiffusion Tensor Imaging(DTI:拡散異方性画像)。腫瘍により、神経が圧迫されている様子がわかる



【3D Imaging (Metastatic Brain Tumors)】

頭部のT1強調画像。非常に薄いスライス厚で撮影することで、微小な病変も抽出

